

書 評

富 田 仁 編

「横浜フランス物語」について

堀 川 喜 一 郎

——あくまで実証的近代化への貢献立体的に伝える——

日本の近代化について取りあげた本はこれまでに少なくない。けれど文明史のレベルで学問的実証性に富んだ論考として、日本仏学史会々員十四人の研究者による十二編（別冊を含む）からなるこの書は日本近代史研究の中にあってユニークな一冊であると共に、この研究を飛躍的ににおしすすめ一大成果をもたらした。

「本書では、外交、産業、文化、社会などの諸領域において、横浜とフランスとの関係を洗いあげていき、横浜という港湾都市の性格のうちに、いかにフランス的なものが滲透しているかを剔抉していき、日本近代化に果たした役割を考察しようとする十二編の論考を収めている」と編者はこの書の序文の冒頭でこう述べている。この一文は本書の性格と内容を端的に表現している。

論考は各編とも豊富な資料と文献を駆使し、主として幕末から明治初年のフランス人と横浜との関係について光をあて、文化、外交、産業、社会、軍事、宗教などの諸領域にわたって、人間のあらゆる営みが題材とされ、日仏交流史の全貌をあきらかにしている。

分析は日仏両国の社会関係と変容を下敷きにし、数多くのデータや関係書に感動的なほどに貢献しつつ多面的に実証の手を加え、旧来の図式が図式として抽出されるのではなくして、常に問題のディテールへ深く入り込み、フランスと横浜との関係を「知的文化交流」という視点から幅広い分析をし交流史を掘り下げているのが

特色である。

幕末から明治初年という矛盾にみちた時代相を背景に展開されるフランス人の活動が日本人の生活の上に如何に文化を形づくっていったか、いかなる生活を自由都市横浜がすごしてきたか、そしてその結果として日仏両国の親善と、日本文化発展のために知的ふん囲気をもたらしたその進歩の役割を極めて具体的な説得力を発揮して論述しているところに、この本の大きな魅力がある。

本書で扱われる十二編は「横浜とフランス」「フランスの対日政策」「フランス領事館と郵便局」「フランスによる陸軍伝習の顛末」「フランス語教育」「フランス、カトリックの人びと」「フランス産業遺跡」「フランス郵船」「らしゃめん物語」「フランス文学に描かれた横浜」「フランス人の見た横浜」「外人墓地に眠れるフランス人」である。

第一編「横浜とフランス」で全編の概観が述べられ、十一編でそれぞれ専門の分野から問題を敷衍していくという形をとっている。

安政六年横浜が安政条約を締結し、長崎、箱館におくれて開港する。フランスは、アメリカ、イギリスについて横浜を活動の舞台として選ぶ。それは「幕府とフランスとの功利的な意図の結合を背景に横浜では文化、商業、産業、宗教、教育の諸領域にフランス文化の侵透をはかるためであった」と説いている。

幕末の政治風土は薩長とイギリス、幕府とフランスという結びつきで外交史は動いていく。こうした激動する外交関係の中で多くのフランス人宣教師、外交官が活躍する姿を巧みな筆致でリアルに描いている。それは「ロッシュ、栗本（鋤雲）、カションは幕末の日本外交の太陽とも言える」の言葉に要約されている。

レオン・ロッシュは二代目公使として元治元年三月二十二日に来日し、カションを通訳官として活躍する。そして日仏両国語の交換教授などを行い栗本（鋤雲）などと親交を深めむずかしい対日外交政策を巧みに処理していったのである。元治元年十二月フランスは横須賀製鉄所、ついで横浜製鉄所の設立を一手に引き受け幕府の軍事力強化へ寄与する。

ついで歩兵、騎兵、砲兵の三兵の強化のためフランスの士官を招き、日本人兵士の訓練がフランス軍人によって行なわれる。このいわゆる三兵伝習が横浜の太田陣

屋（日ノ出町一丁目全域）で開始されていることは興味深い。そしてそれは日本における近代的陸軍建設のひとつの重要な源流であると述べている。

ついで日仏協力に必要なフランス語を解する人物の養成のため、慶応元年春、横浜弁天通り（「現在の本町六丁目あたりではないかと思われる」）にフランス語学所（コレージュ・フランコ・ジャポネ）が設立される。このフランス語伝習所ではフランス人教師が直接授業法でフランス語会話が教授されたという。

伝習生の一人田島応親がフランス語学習についてつぎのように述べている。

「然して生徒は一年も経ちましたら少々仏語に通ずるような人も出来て参りました。又、遅く参りました者でも出来の早かった人は既に七八箇月の後は普通の談話の出来るようになって来ました。それでもうそろそろ陸軍の教師が来ても通訳に差支へぬという時期を図って仏蘭西からして陸軍の歩、騎、砲、工兵科の士官並に下士都合二十幾名が参りました。」とある。そしてこのことは「大げさにいえば、日本の近代化の陰にはこうした語学所の伝習生の存在があったということ」と著者は結んでいる。その後、フランス語研究は一時中断するが、約四十年後嘉永元年（一八四八年）松代藩医村上英俊が佐久間象山の励めでフランス語の研究を始め日本のフランス学研究の先駆者として『三語便覧』『五方通語』『仏語明要』などの辞書を完成し今日の仏語仏文学研究の素地を作ったことを考え合わせるとこの語学所の果たした役割は「日本の近代化に欠くことのできなかった大事業であった」とする論述はうなずける。

こうして日仏合同事業が着実に、しかし多くの困難をのり越えて進められていく。

貿易都市横浜の建設も生糸貿易を通して「港横浜を日本随一の開港場」としてのし上がっていく。

「開港以前は、あまり問題にされなかった日本の生糸が世界無比の良質であることが確められた。そのうえ、中国の内乱による生糸輸出の途絶およびヨーロッパにおける蚕病の流行による生糸の大量需要という国際的事情が生糸の輸出にいいよ盛況をもたらした。……（『港都横浜の誕生』）」

そてで、「幕府は横浜を直轄の地となし、江戸、神奈川、下田其他諸方の商人を奨励

して以て家屋を此新地に建築せしめ、外国貿易に従事するの用意を為さしめたり」とある。こうして日本の生糸産業をヨーロッパに普及させることになる。また日本の養蚕技術を紹介するものとして、「上垣守国の『養蚕秘録』が翻訳されその訳本は現在パリ国立図書館に収められている」ということも記憶されるべきことである。

明治初年まではイギリス資本が圧倒的であった日本の産業がフランスの産業技術をしだいに導入するようになる。

「明治二年九月二十九日神奈川県庁附近、大江橋から馬車道本町通に至る区間に、石炭ガスを光源とする街灯の「青白い光」が市街地を幻想的に彩った」とある。これが日本最初のカス灯でフランス人技師プレグランの協力が大きかったという。現在横浜市中区花咲町三丁目八六番地、横浜市立本町小学校の校舎のほぼ中央に瓦斯会社あとの記念碑が立っているのがそれで、記念碑には左の文語体で記した碑銘板が見られる。

「日本最初ノ瓦斯会社趾
中区花咲町
明治参年高島嘉右衛門
ココニ瓦斯会社ヲ興シ本邦最
初の瓦斯灯ヲ点シタリ
明治七年明治天皇皇后
親シク点火模様ヲ観覧
アラセラレタリ」と。

恐らくこれを初めて見た人々は不思議な幻想境に引き入れられたにちがいない。更に横浜が知的文化の中心地であったことの理由に日本最初の近代劇場としての「ミゲーテ座」の存在をあげている。この劇場は明治十八年四月十八日に完成され『ハムレット』が上演され横浜在住の西洋人だけでなく、坪内逍遙、小山内薫、大仏次郎なども常連として観劇し、これが日本の新劇運動の誕生に貢献したことは意義深い。

らしゃめん物語に語られる横浜の風俗は、かつての女肉の殿堂、「横浜港崎遊廓」^{みよざき}に繰り広げられた遊女たちの悲しみの中に象徴されている。

それは「クレオパトラの鼻」に象徴されるように「歴史の蔭に女あり」で女性の力が歴史の中に大きく位置を占めていたことを想わずにはいられない。吹き荒れる尊王攘夷の嵐の中であって、「非人皮人」と罵しられ軽蔑された外国人の通い女^{らしやめん}「綿羊娘」：「金で春をひさぐ女たちにも愛国の情はあふれ、大和民族の誇りは強かった」と、悲しくも自刃して果てた遊女岩亀楼喜遊はその辞世の歌に、

「露をだに厭ふ大和の女郎花^{おみなえし}ふる亜米利加に袖は濡らさじ」

と詠じている。

喜遊は江戸の町医者^{みづくり}箕作周庵の娘であった。「ここにわれわれは日本女性の高潔性を忘れてはならない」と、教えているように思われる。

いずれにせよ、日本の近代化という最も困難な時局の中であって綿羊娘の果した蔭の力は高く評価されるべきだと思う。

ついでジラル神父、メール・マティルド修道女等によるカトリック教の布教伝道及び教育活道への献身である。ジラル神父がキリシタン禁制下の幕府の目をのがれて天主堂設立のため建設寄金募集のため献身的に奔走する姿を克明に描いている。そしてジラーム・ムニク両教父の努力により、横浜天主堂は文久元年十月に完成を見る。

ついでサン・モール会修道女、メール・マティルド・ラクロット等の来日により布教地における孤児の救済とカトリック教育を目的とする女子修道院の設立運動である。その結果はサン・モール・スクールと孤児院が設立され、明治三十二年横浜にはじめて正式に認可された女学校を創立した。これが紅蘭学校で現在の横浜雙葉学園の前身なのである。

「思えばメール・マティルドの長い一生はひとすじに布教事業と社会事業に捧げられたといってよいだろう。明治五年、五十七歳の時四人の修道女とともに初めて日本の地を踏んでから三十余年間、九十三歳の高齢で横浜修道院長の任を解かれるまで、サン・モール会の一修道女として社会事業に専念し、生き続けたのであった」と。

こうした修道女達のひとすじなカトリックの布教伝道によりフランス文化の普及と日本の教育、社会事業に如何に大きな貢献を果たしたかが細密に語られていて感動

的である。

フランス文学に描かれた横浜では、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』とピエール・ロテイの『秋の日本』で当時の横浜が克明にしかもいきいきと描かれている。

ヴェルヌの一節を次に引用して見よう。

「十三日（一八七二年十一月十三日）暁天ノ高潮ニ乗シテ郵船ハ滯ル事ナク横浜港ヘ着セリ。抑モ此港ハ北米洲ヨリ太平洋ヲ踰エテ支那日本呂宋ノ地方ヘ往來スル船舶ノ寄港スル処ナレバ實ニ要衝ノ地ナリ。其位置ハ日本帝国第二の首府ナル江戸ヲ距ル事遠カラズ、其海湾ニ臨ンテ新タニ設ケタル開市場ナリ、江戸府ハ昔時曾テ將軍ノ居城ニシテ万機ノ首府ナレハ、神孫帝子ノ居地京都ト繁盛ヲ頡頏スル廣大ノ一都府ナリ。」

このヴェルヌの『八十日間世界一周』は明治十一年六月川島忠之助が『新説八十日間世界一周（前編）』としてフランス語原典から翻訳したものであり、フランス文学の本邦最初の原典訳として翻訳史上注目されている。

作者ジュール・ヴェルヌ（一八二八～一九〇六）は科学冒険小説家で文学者というより想像力によって人を惹きつける才筆を持っていた人で、ヴェルヌ自身は直接横浜には来たことがなく *pass-partout* パスパルトゥー（どこにでも行ける人間の意味である）という生粋のパリジャンの眼を通して作者が直接に思い描いた日本の町をイマジネーションで書いているのである。勿論作者は日本に関する何等かの書物は読破していたことは間違いない。本文中の一節に

「腰ニ双刀ヲ帶ヒ頭ニ陣笠ヲ戴ヒタル官史ヤ「連鎖ノ戎衣ヲ穿チ表ニ絹地ノ軍装ヲ穿タル天子ノ近衛」や、「うしろで結んだ幅のひろい帯が花のようにひらいている着物を優美に着こなした女たちの間を歩いて一日を過す……」と。当時の日本人の風俗を的確に描いている。

これはまさにパスパルトゥーによって演ぜられる実験演劇とも言うべきもので、象徴派の流れを感じさせる夢と現実の物語である。

更にこの本で作者は日本の絵画から想像したものと思われる自然描写が素晴らしく描かれている。この日本の自然美を讃える感情は「十九世紀後半に生きたヨーロッパ

パの作家が食いいるようにして眺めた日本の絵から創り上げられた日本の姿は、かえって鮮烈な魅力を持っている。」と筆者は評価している。

これに対し、ピエールロティは実際に海軍士官として横浜に来り、住み、その体験記が作品『秋の日本』の中に結実し、その流麗な随筆風の形で描き、今日も尚多くの読者を持っている。

その作品中に『江戸の舞踏会』つまり鹿鳴館の舞踏会の様子が記されている。

「この舞踏会の宵に、ヨコハマ駅は、八時三十分発の汽車に乗るためたいへんな人出である。ヨーロッパ人の住居留民が、あの伯爵夫人の招待に応ずるべく盛装こらしてたたずんでいる。オペラハットをかぶった紳士たち、レースの頭巾をかぶり、毛皮の外套の下に長い薄地の裳裾をつまどった淑女たち、そしてこれらの招待客は、われわれの国のと同じ待合室のなかでフランス語、イギリス語、ドイツ語同志それぞれかたまって話し合っている。この八時三十分発の汽車には、日本人の姿はあまり見かけない。」

ロティが神戸、京都、横浜、鎌倉、東京、日光と日本の各地を訪れるのは、一八八五年（明治十八年）の秋で、二度目の日本である。

そこで行き遭う人々も、上は皇后から下は庶民階級に至るまで多種多様にわたっているのです。ロティはあらたなる興味でそれらを見つめ、日記にしている。そこに描かれた横浜は急速に欧化していく文明開花の様相が一フランス人の目を通して的確に捉えていることに驚く。

ヴェルヌの描くパストゥーや、ロティの描くフランス海軍士官が感じた「コスモポリット」な港町横浜、その横浜に魅せられて「港の匂いが好なんです」といって海洋を漂泊したロティ、そこにはフランス哀愁詩人としての心情が歌われ主題は一貫して異国情趣の下に、繊細ではあるが移ろいやすい感覚の美を追求することにあつたように思われる。

高い文化と教養を身につけた多くのフランス人が「文明開花の活発な動きや、日本の特殊な風俗、伝統そうした中でまじめに生活する人々を通じて描いた横浜」幕末の動乱期にあつて、日本を近代化へと導き、その基調を築く原動力となったフランス人の役割、そうした歴史の重みをこの書は立体的に物語っている。

全体を通じて窺われることは、あくまで細密な実証性からくる記録の完全さを期していることであるが、同時にそれは単なる歴史記録ではなく或種の歴史的ロマンをさえ感じさせる。この論考が新しい世代に話しかけ、西欧文明と日本文化への正確な観察力を培い未来に新たな展望を開いてくれることを期待してやまない。

数多くの写真図とこの本の別冊『横浜フランス小辞典』は横浜の旧跡探訪の好個のガイド・ブックとして趣向をこらしている。（2・5刊，A5三〇〇頁，産業技術センター）（尚この書評は1979年図書新聞（第149号）に掲載したものに補遺，加筆したものである。） Le 25 novembre 1979